

## 情動論的転回をめぐる学際研究： 情動の思想史を踏まえた〈帝国〉の情動装置の系譜学

The “Affective Turn” in the humanities and social sciences :  
a genealogical study of imperial affective apparatuses

水嶋 一憲(MIZUSHIMA Kazunori)

21世紀に入り、グローバル化の加速度的な進行の中で政治・経済・文化の領域が複雑に絡まり合いながら、それぞれドラスティックな変容を遂げつつある今日、人文・社会諸科学における「情動論的転回」に大きな注目と関心が寄せられている。情動に焦点を合わせるこのアプローチは、近年唱えられた他の「転回」(言語論的転回や文化論的転回、等々)と同じく、諸種の学問領域で試行されてきた生産的な研究の動きを整理・活性化した上で、今後の探究のための新たな道筋を開こうとするものである。と同時に、情動論的転回は——以前の言語論的転回や文化論的転回とは異なり——、触発し・触発される身体とその情動の諸相に照準することをおして、従来の社会理論や権力理論のパラダイム転換、またひいては21世紀のグローバル社会における身体・テクノロジー・事物の新たな布置の解明を目指すものである。本研究は、かかる情動論的転回がもつ意義を社会哲学・社会思想的観点から考察するとともに、現在のグローバル資本主義の動向と動態の中で情動が果たすきわめて重要な働きを学際的観点から把握することをその目的とする。情動論的転回をめぐる学際研究に取り組むさいに、出発点として問わなければならないのは、そもそも情動とは何か、という基礎的な問いであろう。マイケル・ハートは、最近出版された学際的共同研究『情動論的転回』に寄せた序文で、「情動の理論を最大限に推進した哲学者」としてバルフ・デ・スピノザの名前を挙げ、またスピノザの思考が、「この分野の最新の研究のほとんどにとっての直接的ないし間接的なよりどころ」となっている点を指摘している。

こうした視座をさらに掘り下げて検討するために、ネグリ&ハートの〈帝国〉三部作の最終巻『コモンウェルス』の日本語版刊行に向けて、監訳作業に取り組んだ(2012年12月にNHK出版より刊行)。

情動論的転回をめぐるこの学際的研究は、〈帝国〉の情動装置の分析という独創的な方法論を採用しながら、アクチュアルな成果と意義をもたらすことをめざすものであった。上掲の3年間の研究成果をおして、こうした目的を十分に達成できたものと考えている。なお現在、ハーヴァード大学ライシヤワー日本研究所に客員研究員として所属しながら、“Affective Networks in Communicative Capitalism and New Media”というテーマの研究を進めているが、これは本分野別研究を発展的に引き継いだものであることを付言しておきたい。